胡蝶　巻名ハ光源氏　号し初子乃同年

三月九

春宮ニ入給ふ新造（レンサウ）乃御殿（ヨリトノ）ハ三月ニ成給ふ

所の実ハ春世界（ヨカイ）にわたらせ給ふ時ふみ

迷ふ山乃さまのみち〳〵ハ春道いまゝ見えに

くき乃ミなれ乃ミなれ有まゝきと思ふ

山乃こゝろを雪降る世ふる所ふみとゝもりて

思ふくゝ之思ひ

経営（ケイエイ）する而

九曜文庫

おもしろき舟乃乃く
中宮　秋好く
かの春まつられ　花乃
この比やとおもし　紫らんく
おもしの君　浮のこころく
いいてもろうに　同六条院乃中よ今中宮
いましまもれかろうかなこなくやうまし
春乃は便なしとて　昔の中宮おといの屋
同院乃中なこたるくいわうくま五木

さんとろきて一見乃ゆ西
若き女房中宮の御乃女くしく
西の院乃こなたひつしさるに町と南のおもく
とのあひよるこきゐるく
もいさき山さなその中に　海あるく　こなたなるを
これいへくりし舟下手遥に舟とまれいひを
つたへたり
池の舟　亭（テン）すくし
こなたのやうきくく　紫の上の女房くらちく

是はつゆにのうてあを物
詩賦鶴方おかはいると云し洛陽
詩はとうをあをんまるまるのやうに鶴風
を行てよくゆくものなれいく
みつ波のへはあの山の麓たら中高の傍
と云しんりうく都ふと云うきをてゆるく
かりはさうをうをう花をの義一元
序をめる 文集
続序萱藤咲文佛紛紅葉樹

此物きい 山ゆきれ濤いの物 迎はとうとさあ云うと
不也この方れ中文の四角のくつとの方のの
人くれ方ゝ作者いゝ所うゝ作れう
かめ乃上のくいい者不苑乃業此云美氣
別ニ蓬萊ゝていい不一形ゝ
春のうれ服あの京方気うゝきゝ方ゝ
ゆ京もゆゝん墨も未
ゆゝ春 平胡蝶ゝ 武陵の桃ほあとのと
いまもあゝす 白毛ゆゝ

こくの声ハ此律ハ声いかやう荘厳ならしめ
陽なり
此声の感堂上にも不絶ならし
和乃郢 郢人へし
又それ声の志ゝあれハ之
声の志ゝくひくきハいとこえまさりて声
又一流ゟ和の志ゝく者ゝこゝえるをきゝく人ハ云に
音楽をもするく人もこそ判りもそくなると
其ゝ又律に依へし

わなやき　律の声ゝへし
中家ハ和へそゝ　楽の声ゝ有之
其も春のひかりを　云釜院ハ温和なる声ハ有子
かく葉之の時暖にて男女もまします
ぬをのさわかあらにくゝ思ゝて能よきなる
方いろをえ此声々いなりを玉ゝゝのたいなる
故に弟ゝてひたなゝなると
まゝのたいの姫君　玉かゝゝへし
ことなゝく　云乃之　てんとそあし楽の道之

中の男子もて四国へ同行致ス
きんぱいとて男子打もめ人
おかきて
乃のかしらて宮ハ洗ものの地ものと
内乃ものい所の中ハ檜ス
兵部ハ宮　兵部ハ家ス
きゝとき　うきくて　きれる所ス
ものもおゝい者ものと
いまうきの内ハ　ものもさいのうきさ

きゝの乃ハ乃きと
ものきの乃　花を倒よりものの乃ハ
きりの花ものの花ハ者の地ハ
多の中ハ中ハ
多し
乃きゝ　花の花乃
ものの花を　中を五所ものと
ものたまの
中宮乃れとき　三月ハ迎ものもの

二八月に有明に定を例あるを以讀經に
大般若をよむ日の此よりはじめ　東岑に花鳥詩百首元
寛元の年此きて東岑を見よりはじめ也
あるとき中ごろ中宮の見れば也
はるの此きはじめ　はるの着座をあるべ
しうち花此あり　はるひるて此中宮を一
此文章ちすを　春のとの宮の此方ゟ也　俵花をあるべ

当てふ　新人に
而の宮　時ゟをうたに歌の心
花ゟ花ゟ作花ゟ花ゟ　宮の花に
をとひろう　鳥蝶の意歌あるなりやうを
をとをとを聞し
あゝ花詩月し
ゟゟ蝶ゟゟ八人に
ゟ中ゟ　夕雲に
花ゟ秋ゟ中宮秋を定ゟ

去年のころ心蝶をいとうとしを
時の乃世をうら時のあるうの
そのりおもひて情をかけし
うらのうつゝ、ある形しの時の勢
しるのかくにあり
きくいにる鳥の去て蝶い墨を武流鳥の色
のまかさきそまこるのうえいとも少をもみき
のこの蝶の世うまこるの去もあと云来
あり不国

家の中家のかく
かり人蝶鳥乃臺て
ちらき一きね きあく
きもあきあいき れやの桜のさとをし夢れ
きうり時あくき うひとるが
ハハ時乃うをの乃世かもし乃て
こてうう
ハありてそ紙者ハ今ハくるき蝶さ
それてきうあを

とくまとまる世ちく世ちと中をは百ちの
時鶴たきこくい飛つあんそを思いそうを
一紙と一つあとと見るへいさるりなきい
西海方い里やちにをきりのと者を詩
ちく
まとわのひとれ時るみりのちる中交の品
方乃世房逢へ
乃ちり道いとつと云と者を
西のたいり鶴とくい海方のはるを玉ひ

ひうり多
ふきれんりちやあくと、ふもあ
と云ちをうこひてりきいとらあ花
このたんとつきやるを思とめくよこまりて
ひ安きこへいい玉ろのてちいをかるへ
玉ろいいうきとるのあくきれいの
ひるこい寺道ひるへとの
きりきこちらあり共うちにそあつく
らくしきとく

ゐるとうも　れいとてそうい　里ゐるを
きこしめ人　玉かつらを会ゐる人多く
ちくようゐゐるとゐるゐのゐうゐ　ゐ
ゐ　ゐ　内ゐ　ゐ
ゐ中ゐいおきちく　玉ゐの元ゐいん
ゐそゐゐ夕ゐゐいゐの元ものゐくゐ
ゐゐ
内のゐいゐ　ゐゐゐ　ゐいゐ乃元も
ゐゐいゐゐゐ　ゐゐ

こゐゐに　夕霧ゐ
ゐゐゐゐゐ　ゐのゐゐゐゐゐゐゐ元由を
ゐゐゐ　ゐゐゐゐゐゐゐ
ひゐゐ　ゐゐゐ　ゐゐひゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐ　ゐゐゐゐゐ
衣ゐ　ゐゐゐゐゐゐ　ゐゐゐゐゐ
たいゐ　ゐ　西ゐ　玉ゐ
ゐゐし　ゐと　玉ゐゐ乃元ゐゐゐの
ゐゐいゐゐ　ゐのゐゐゐ

そやうにとへうるあるよれまりかくしき
ものの絵部四条いの法内れ是ねを云なうれの
中に是一阪とへうそなるにつひ久ぬ始の
方にいの法りいつうそうそうそうかの人まて
四ん乃色まなこそ法乃是と法乃方是
おもひ人あるに世界宮をうきてい水ぶ
くへきそれ心あるに世ハ法るうそんをとそ
もへ乃是とそ
右方ひきらうく実法なるへうう

ケ乃方是いるる方法をつる方もこ
ひのこらうハかくへんをまうそうかう
孔子祖乃人く云いうそそ俗に就乃川
まきあと云ったうそ法と事乃
おふとそ
さうくしう玉ひうそ乃美へうまいれく
大也とうあくそれり世れ歳へ晴ケう
ある情な芸時い云んに是
やうそふのかうて大方の情ケ地なとうるを

乃みをもさんれいをもとりをもひくいてい
ひやまさる乃も毒をもとるもれて毒をもと
や也乃をさんも素れてそうてるるきとと
如のたるキのみをさりこと
みをもり乃に云乃をロとく如乃をと旨
をもしき
そ乃つりわちきを花を果い歌の毒をる
らもんと
宮大社 長谷をひけらと五人と

歩なく 食民をもと
こ乃比のをる乃多をのをる
きいをもを思ひをしを多おこそ
右を い玉をを思ひをるを乃をもを
と旨の四人ハをのをめい中ひをと
正乃ひしく今いを乃をるをもを
こと人を乃をさんそれのをを乃をさんいロた
しき
さうをるひ旨と玉ををとき年ハ十三ひを

石巡ハ人ノ侯乃人ノ為シテ公ニ出ル
きに人の世をそこ
大巡ハ侯の知るものの為ハ為ハ巡
此世ハいきしきしきしさもそ形ハ而侯
のをの乃ノ乃ノ乃巡乃の乃ハ乃きとく
見ハ巡ハ為ハ為ハ巡ハ侯ハ巡ハ巡ハ
ををそそををとき
いとらたき為ハ為ハ巡ハ為ハ為ハ
ア巡

ををハ人乃族姓を云ハ
巡ハ巡ハ
為ハ為ハ巡ハ為ハ為ハ為ハ
為乃玉ハ為ハ為ハ為ハ為ハ
為ハ為ハ為ハ為ハ為ハ為ハ
為ハ為ハ為ハ為ハ為ハ為ハ
為ハ為ハ為ハ為ハ為ハ為ハ

いくら年へたる父君〻の方ハ継母の此中宮迄
殊なる人のおはする方ゟ忍ひてしれ人の室に
有て于段に宮父ゟ参る也しかと
宮ハひとりさ人ゟかと宮に参て宮迄
ゆう人皆人々て何程
あまりて地みとの示を承りてる男て
二有と思ふ々参ての宮ゟ出まとて
大納ハ年へたる人の此小君の平生地の気ほ地
る勘き成にいとれ乃て此玉かつをれ参と

此北方ハ此宮之乃あねさまハ源の君にまいりてハ
しかうれける
妙うさまの　此君の君ハ父みとのもえさ給けるハ
いひらき乃御さまと　いとまきとのかと
のうちにあるき迄ハ承君を少なくのとこ男
みもくて　いつてもとの名と源の乃参
此人りかれ君　かひハ承可く
の方乃君そ迄こ　彼の君やの君へ世俗より云
うらみりて迄て　恨るやしと思へと此世の参て

みぎりにて　玉かつらの乳母さ申之
こ宴り　玉かつらハ源を京より尼連て京
のおもてなさんハ中く君ちしかて
ちり　物なり　住吉物語なとにてもやはらく
なもし　也　あり
さのハいらく　名ハ源く
こえてまかり　さ宴之まく
いまへのハ名のくハのこく
かめなふ　源の玉かつらまゐめかさえ

たまふこと飛鳥たのんにハ源のくにハおかりましと
ましきこと　君なるへ
うちなくしこと宴との心のうちあそそは源へ中なる之
たのもしけ源の松かくふのもとさくらのふ
めれなるとこ之
いと思ひらすしこと玉かつらこと石礼の乃の人あり
又おちハまいていとゝ
わしてよきよし文集四月天気和且清
まつこの姫君　玉かつらへ

[illegible]の上に似たり
中将の[illegible]白少き花に葵上に似たり
なほ似たりと思ふ道は玉ゑは能く
[illegible]に似たるなり
袖の[illegible]香をたぐへ
源氏くるくるまくぬきたる
[illegible]の如く 源氏の[illegible]
[illegible]
いとうつくし 源氏白乃[illegible]

うつくしうして 源氏玉ゑを思ふ
屋きくはあり[illegible]物を源の白藤
はの作りなる 取和且清乃匂へ
初着単元与作軽紗白を同詩の中の匂へ
まことのおやあにはうさまの乃はやおとを
さいはうに我思さきてかうおくれと云
源とありかく思ふをとゝみてくれはよ
かうそく思ふ
へそあるおりつゝ

くもゐかと　ゆの　ほく
うらよなれる大方のよれ人のすし男なる
なまめひめへき乃ハうきてを玉ゑ玉ゑいき
きりうまりゑと
岩部なるを　玉ゑのよれるの子こ
くくひなりし　見ゑるをみね
野ゑきて　寅義ゑなきゑの四
彩りめ　見ゑる玉ゑのみれ　ねゑの字ど
てゑく

大田の書　花る　詠む　ゑ　時
むきのもやさま　寅の父と人い四こ
おりやときゑう　玉ゑの　ゑ　男ゑ　ゑ
出乃中将　おゑ　みめしゑ　ゑ　ゑ
たみえみを　ほの　ゑ　ゑ　ゑ
きてゑこ
ゑこゑ　一方むきるこ

螢

巻名詞并序を以て号やう侯ものと五月
の月と豐の遊やと
今はむかし 源氏物語 のうへさんおもしきと
れれ内大臣なる毎月ゆうきうと天下を
掌の中にのごとく
子男ふ毎る 源の内大臣なる位置まてなる
おの巻こそ尺しうり
たいの姫君 源をこれ今月ごもあみのふりい

をけ子のんやうきと
のぎと源をまま豐をあうひとの見れな
遊とかあ不て物ものと
かまとうう京の源乃内なとこれ人を思ひ
月をうう
ふう月をも玉うう年もこけるれうり
ものとおり
おうとおおおうの大田の松のなとお巻だら
きやふうたうく人をもうれ

わくふるゆうくんあれてをり
ゆらのうちに年月をへて八ちをれそこ
五月雨うゆゑある事ニハ人なれハ所をれくも
云り月をいとゆ花をこしらし
おきちき　ものゝ家ゝの
くくをるやん乃ゝ玉ゆゝの出角ゝ家
人のおきゝ
此物ゝ所ゝ又ゝ上ゝ三位中将ゝ山ゝ長ゝ
き家ゝ人のゝ上ゝ玉ゆゝのいゝこゝ

物ゝ乃ゝ家ゝ保ゝ物ゝ
ゝをゝ家ゝ物ゝ乃ゝ
のゝ家ゝ
うゝをゝ物ゝ家ゝ
ゝをゝ人ゝ
ゝをゝ家ゝ
ゝをゝ家ゝ
ゝをゝ家ゝ
ゝをゝ家ゝ
ゝをゝ家ゝ

いとしきものゝ浦のきすなべ
折かて思ふものを家ねかくねをうらもと
家乃君家の浦乃浜ゆうちとをゆ
いとあはりあつうきの見ると浦の海割の
こゝへ

第の巻きもりたるひて
ゆるくの思かくるきうひてあくら
ひきへきう此家ゝをいかゝ
ゆへきりていなくきと

いとかうて玉うつのゝ心
おうらもとこゝうきの家の地乃に見
うらひきと

萩をうきこゝ乃 花ゝる浦乃 此
扇きかう 玉かつへ
なうくしきと浦の地の宝のゝ
敷しをかと 海岸浦の山ゝをうきゝ
うそあきていとゝのうあかし
かくーをぐこゝ浦ゝ見ゝると見

まことの　手花と　見るの心の　姿をもて
　　ゆくハ　さらに　きれとも
　　ものかとも　はの　ゆくの
　　家ハ人の　おもふ人　玉うて
　　かの　ふるひ　見きくんを　書とる
　　あの　て　葉の　ふくこ　はの　推量　たハ　ふる
　　ふく　色も　時　あらの　きの　虫の　男　ふくきを
　　たきを　人の　男ハ　ふくを
　　ふうの　ふ　地し　人　ふ　虫　事　ふる　ふ　いふ　ふ　れを

　　よ　ふ　ふ　ふ
　　声ハ　て　こ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ
　　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　虫　ふ　男　ふ　て　ふ　ふ　ふ　ふ
　　ふ　男　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ
　　ハ　男　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ
　　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ
　　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ
　　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ
　　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ

部とをとまる兎くるるを見給ふに
よりてをまてそらゆくものをみるに
かのあるをとりて きくとそれうまいるに
ぬきをいかとて 家に法しくいのるを
あやたらて 母のかくこうのうちをしも
うらくいきて 法の光をあらわ
かくよすをみるかけを 家をくいれるを
あやかとて きくを 家の光母をとて きく
たくきかいあるきをとて きくを

人をくめありさなれて 今玉のくの有母はたに
なるき虫 法の家をのをくかきてあるて
ちくき方乃ものも来めを 人きくといを
家をを
さるいまこをふ 法のゆくきをくれるを人を
又男ちをめくまいをいるを 法の天地のの色
中家 秋ぬく
やんをきを方れ中家いをるを家に玉男
のをくにいをを玉うまをを

しきのかたに東宮の西方の西のたい
王子のぬのひかうし馬場くきなく
いるるやよべの宮の戸をひらき
ひろひきのをそろつきまいるるを
人のんや始り宮ぬれあいたる戸なるを
いきをこうしをおこさいをうちをしへをうを
ゐ人ほそるきこしをあしまいをしを
ののひて又ゐるまいをうしきらし
しまりいきをうひるる人をやをこり

をそはうのをふをこり
いやをなをいやをくをのの月初の新をを
をつをを云ってを
ゐのをを初つきの鏡ほの戸をそにて
まるきらまあんをを中にまるのをあ
やををりをるるをををあ
ゐるををるべ人のりををるの戸をを
なりをるを王ひつのんを
をうきをやをあをたりあり

乃かたれ春ふるくれの杉の長あり乃と
なかうをいさうをなきつ乃のうを見を世とのの
をうへをうをり
なをくや
うにを一ぬとをきわ春
なの世をる春いさめうを
こをうを人くとロ
ぬんうをいて春りきん自をうををうを
春つをて

春をかをうをを春ふるくのをを
うてをくをロをうををくを
わっくしくを私の春をいわっくををを春の
臨しをわを
てをかを玉のつをの春
春りをうる緑葉をうをの春ロ乃
春くいくのをずつくてうほのんをけをを
春のつをれ又春ふれををくをりつをて新
をうへ又春をををををををを

あしくさてハかりそめに世の事と云条
のうえあるを人くきゝをしなさ
こゝろのらくらと花を星の見なさ
たいの四方　玉うゝ
うるゝのい花ゝる星ゝ
ちやけ乃うゝ　一ゝいちやけ乃しいかゝ
ゝる乃のあるをさるなきゝ　一ゝいゝ中かゝ
ゝ乃ゝるゝを云り花を流ゝ
らゝ勝ゝい乱ゝて心大勢ゝ乃

今ゝ賀ゝ乃競馬ゝて能ゝ乃ゝ
ゝ　ほのね
人ゝハ人ゝ二ゝ
ゝゝを　歌のゝ
ゝ
ほゝ
わゝて
ゝの内ゝ花星のね
ゝ

ちのこと　是を　家の名とし　花鳥風月に
られ家の事といひきたる
大きことなき　詩となく
うて見る里ぶりにて見物のひとつにあれば
身をもて俳の趣意をもあるべく
人のともすして俳の本心をとくすれ
なるなと　ひをくろし　今は家の名も若
わかも玉つのふとやかにやて且顯也
まきこよすり俳の心とも見えなり

海いつしたかきくて俳諧のあるべし
いなものつらんい後いなきこえし
かられかゝられ　又ありせむ　一義いなくの
詞(字)し　一ぎいなあくし
俳諧しかつて　ころうれはなれをまことにあるべし
らいなきをそて夏の流るるはつなくして
この所の本心をと
そのことも　あやめて　ゆまいるくせんとあちる
まなくなきしたりまれとゆみあるに

こゝろのまゝのかりしあれなるとなくさこそ
うとし
みなゝれはけしきなるまゐるかれいまゝ詞に
ところ／＼ハことはうたとおやめと
またいてきるとなるといろなきは
みつきをかゝるさし源氏の御中にみえと
たかひれのすゝ　かゝるのなかいはかねき
けあたえ　これあらかす
あれらなき　かゝるさとにはかれくとなる

源氏はなのなかいつのまつ　なとゝ
ゆゑつくめあとし
のとやふおらいさ　源しめつ　なかちるさきと
ゆかとにゆかり
かつる　さるれし
つまるるゝれ　かきこくものかくし　ぬるを
かれもつきなうしはるゝとあひも御
かミあつさ母　まゐりのあつき
まさしのさめさせ　かゝる　くし

さしあたる　そのときのみやすき三ちゝまでを
われしめへ　わかれしきちとて地
わかものとて　人やのもろかし
きこえのめて　御返しとなり
郭公とふかけかれこゝおもれなのさまを
みかりよのたのめもれは　人やのやすかりかひ
よもなきあまたまゝなきに
いろいろこと　英　るへきとめ
てならひをうこすゝめさしとなり

ちるけれは　なき地紙なくの花をあはれ候
ひめきさきのんてやしやといきむらへをへ
さいわのかれのんへりしと
三ろてみきくるを　なられとくあゐすち
ぬきれとなつれしもえらかとこれ
人やあかれやと地衣のあれ
さしあし　人やの地かりうたとすきる花の
このまて
人しひりのわかる　此所まくらのれさ

人をなん　所をとはるるに
はばかるべきことなく長いきぞし
きるるに　なるにしたがひ
てあらくなる所のきぞ
うの人のうへ　所のわ
このかうとはやうたいとあきてそうぞう
ぐぐのうへ　ヒテ　シルカ　コトハ　ソノ　ナリ
密言有　隠ることなし　信代人しる所の言と

ちきり
うきをいとはいまれいうやうとうれいなく
よのうつりてゆくをきはまれとせうとあきはと
ひとりいいはるこ
人のをとをつくり　はをいも一年はと
つくやいうとあり　そとしるるをはと
もろくなさいあく　ごしやう
こころのつくやうとそうるいかも
をこのときはあるこのもし

おもしやさて　文作こそみつからかしこ
そのてらの住は又そのうらん時節なれあへ
きれいなる女房はあるましきとおもんを
おかうとうらやまんのをみて
それをみてそのりしき　このたんやらくきこしろ
きんと数しあそやてそうじにならんをてきとん
もろけびんとときすること
はるとて示あって　されすてうてこし
さいこうろ大せつとこそ示れうかなへい

すれと言ふしやのきてくされはもんちやうと
やうまんずんきうしとときさうるの中し
おこんい一切のをやせし
さうてきこあい　はこ言ふしやのきうと言ふ
せいの時にきうの大小やどもかくへとき
そうこのとさまふ西のさとうめい　はのさらく
そしえきる人　あるこうちきてこらし
やかんとんうとて二やのうとをかくら
まうしとのうてきうて御やかく

三世の諸仏善吉菩提に授記して
一鉢とのたまへるものをもらせたまへる
是をきて行ぜんとうしはぎ者
の中にあるとも三の不
善をもて一きに一ぞ三
ぞ三を一三ぞ作てるのみなき
なたいとうのみと人の世あるとも
のとを三ぞ天たのみのとをもてまた
ぞ作ぞ三ぞ天たの三の許のまくと

まをも宝とをきらめぞ
をもぞ三ぞ 法の日輪
三のあるぞ
きをもぞ作ぞふ
ぞ三ぞ作れ 法の
あぞ三とのぞ作ぞ
ぞつるあぞ人にふぞ
ぞ作あぞ 法の意
のぞ

さきこゆるも　堺のふくらん　あら〳〵かきくもり
かるてまてるふくろう　あさきを
めして　まゐらせ候よしいおろくきや
うとうり
路の御為　路さまのこの路ものや　おのれん
そるのこ
まちくれ候とてこゝろしに　路さまの御らそすいき
よくやしなれえもうと日様しまう
このたらん様ぐ〳〵れ　まゐらせ候　又路さまの御かた

このたびありがたくも　殿さまのおや〳〵　又浮
にあらめてやしなん　このたびあり路こ
なめきてに　浮のこゝに
たいのれずこ　玉のきよく恐けて　尊き仏にまよに
冬のんつるの御らんかた　あれこそのきに
うれしやてまゐり候　右ぞまてるあつかたの
人くしにかれえうちみもろしたこれと
おもうことのまゝて
まくらふ　らめうらて　ちくらこ

そのゝち ゑちぜんさいのくにゝおちつきて おちつきぬ
かのみぎはとくにゝもとより
なきわらはのみや このやまにちかきやまに
たちさまよひけるに中山をたへ
ありけり
しかれぬおもや 三ぢうやしろのありさまは
たちならひ うれしやとて
いまこそしおもきたるに
なきさそらもれもなしにまゐりけるかな

てうもん人をおくり くるまのしりのもと
みつから そでをぬらし
そのことはり よりほかのつくるき
ありさまにしなかりけるとて
まつく 座右銘云 毋使名過實
ことはかきなけれは あそこみいりてかのあるし
ちゝのはちをかき ゝこゆるきこえんかた
おきとて わがこゝろのまゝに
のかことなき まあかりぬかんとたまへとしとん

えちのくにさとをはなれて
中なかのきを　はるかに
うちこえて　ひろきのとのはてに
なるなれば　なかきをのはてにあるとぞ
たいそんは　ひろきのとのはてに
なるべんもちい　はきうとうりあること
なるのゆへなり　今のはつかとなれば
そこをば
あらしなを　へたてのうらにはつか
ゆへにあきとはまつのこゑ　やすらへて
あてのあきをしるべにて　ゆくこと
たゆまぬ　例心をんなを
きしいうとは　雲井のわいうあんとく
をそれなり
きとのきをうち　ひかしてきたること
大中ね　してきを
はるたたら　ゆこと
なをえは　はきのこゑ　はるのあの

[illegible]

又海山きとかの[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

海辺の[illegible]

[illegible]

[illegible]

いつこ夏　ゆくとも寒のなるとす　雪のるるん

　　伍市六の夏

ひとあつき　ゆかきうこ

中なるまで　夕きうこ

ちちきてちち人　六条流れ

みりけ　そけこの川　禁野（キンヤ）といふて

禁川

ちちき川　ちけこ時の　色うつる

たちそきまで　うち　相まうと

[illegible]
すいさん　昼のふれて所にたゆたふ物
所のとき　ひかりさきにいろ[illegible]
[illegible]
色をかへて　夏のくいきのもし
ゆのうちにうつる　所のとも
のうまれ六条院いらしき　こころかうそう
そこきこいかのうちあまたあらし
[illegible]（ヒヤリヒヤウ）　所因生後世のこと

いとかなしい　ふるやまの色と
実ふるはるはきくくく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

そのでさる　ほのねはーさいそのね
たくはるきこと　三年の宴を海ゝゝゝ
ゝきの下ゝ
きとけらあり　ほしきもとをあて
もしきのとと
ゝゝきこと　叢海（ウツメウ）しのと
さいかゝ　おそのんてさんに海と内下とる所
中かてんとあゝきゝゝと
かやの下に　わこととゝ　おそゝいかのゝと

あいはるとかんあるとゝゝゝ
ゝとと
とかゝゝゝあゝはゝゝ
とゝしきゝゝ　ゝゝゝ
こゝかよ　わこととゝゝ
かゝゝのあゝんかの　ゝゝのあゝんかのねは
とゝゝゝとと
やゝとゝゝ　ゝるぎいかゝ
かゝきゝゝ

このうめ　めうとのなかしそうやうを
あるときあるやうにあるじはいとをかしう
あるやうにきたいたるを
ゆきんとて　わこんいとをかしうまうさせ
きれいなるものを
なをく　ものをいたうかうをを
うめをゆめんん　ものを
ゆかしとのたまうをきたりあんんを
あーまいろ　えいたくんおもをゆをはれて
えうを

えうにあうをきをを
さうしほのお
ものををを　あーまいろ
めうをおゆたうや
えいとはのやと　ものんとゆやとをうを
をうをを　このはうをうをきたあんん
のうをををあうをてたうんを
てはうをを　ををあて
ーまいにあうをきを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

中なかれい川なるくるるる
たれしの中にかりたるうちつるるの
かりとるる
たちう一ちはたちちかりつるしばしくき
つミかりきるる河海魚もつとをるもれ
き一のぎうちきやや
とへとかりにきるる不あるとかたの見
かりるかりるるきんたちのるきるる
きてらかたの下うちへんきんてのるる

下るるるのるるて
きるるる
かりるきるる　かりるのきるのね
てるるれ河海のるいるるるのるるきて
とうちるきんるのるる
たるかにるる内下のるる
かりるるのつるるる人へうかのるるるれ
ゆるとるきてとかるるかりるるるかるい
るんたるるるんるるかりるるるるる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
いなとゝろ
あの天めと　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]の人　この内方下あり大ぜの人ふ
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
きこえない　内方下のぐぶし

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
きこと[illegible]
[illegible]の天のね
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あるときのこと
たたちうに　ひとりとなりこうしゐを
いとせとせうに　ひとりやくの
ゑかの
あるうえに　ぬれのかけうとき
ぬれのきこうとを　ぬれてゐたこと
あうとおもひたるの
うといきうと　中納言のうときくを
うるうきとを

おとのうるとこの　ゑいうちゐをいる
せうるとうきうというゑうる
ぬれたいの　あるぬれ　うるぬきぬ
うきて